

静岡市埋蔵文化財調査報告

のう じま
能 島 遺 跡

— 第3次発掘調査報告書 —

2 0 1 3

静岡市教育委員会

例 言

1. 本書は静岡市清水区大内新田に所在する能島遺跡の第3次発掘調査報告書である。
2. 本遺跡は都市計画道路日の出町押切線の予定地にあたる。このため本遺跡の発掘調査は道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査として静岡市教育委員会（生活文化局文化スポーツ部文化財課補助執行）が、静岡市建設局道路部清水道路整備課より委嘱されて実施した。発掘調査は静岡市が主体となり、現地調査及び整理作業は有限会社バル文化財研究所が業務を受託し、静岡市教育委員会の監督のもと実施した。
3. 現地調査は、平成25年4月9日から平成25年5月9日までの19日間実施した。整理作業は平成25年5月10日から平成25年9月30日まで実施した。
4. 調査体制は次の通りである。

発掘調査

監督員	大川敬夫	静岡市生活文化局文化スポーツ部文化財課	参事兼主幹
調査担当者	片平 剛	有限会社バル文化財研究所	代表取締役
	日下恵一		学芸員
作業員	藤田猛史	高橋文也	須田智 松原実

整理作業

監督員	大川敬夫	（前出）
調査担当者	片平 剛	（前出）
	日下恵一	（前出）
調査補助員	萩田真由美	有限会社バル文化財研究所
	佐野貴紀	学芸員
作業員	藤田猛史	高橋文也 橋本成代

5. 本書の編集は、大川の指導のもと片平が担当し、1.を大川、2～5.を佐野、6.を片平が執筆した。
6. 本調査における図面、写真、出土遺物はすべて静岡市教育委員会が保管している。
7. 発掘調査及び報告書刊行にあたり、下記の方々から御協力・御指導を賜った。明記して感謝の意を表す。
（有）キーオブライフ （有）TNC 池谷初恵（伊豆の国市教育委員会）小泉允子（順不同、敬称略）

凡 例

1. 遺跡の略号は「NJ」とし、遺物の注記にもこれを利用した。
2. 本調査は世界測地系、平面直角座標第Ⅷ系を基に設定している。
3. 図版に示した方位は真北を示す。
4. 断面図などで使用した標高基準は東京湾平均海面（Tokyo Peil [T.P.]）である。
5. 土層の色調は、『新版 標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修 財団法人日本色彩研究所 色彩監修）を参照した。
6. 本文・表・図中に必要に応じて遺構記号を使用した。これらは次のように遺構の種別を表す。
SD・・・溝 SK・・・土壌 SX・・・不明遺構 SP・・・ピット

目 次

例言

凡例

目次

1. 調査に至る経緯	1
2. 環境	
(1) 地理的環境	1
(2) 歴史的環境	2
3. 調査の概要	
(1) 調査区の設定	6
(2) 調査の経過	6
(3) 層位の観察	6
4. 遺構	
(1) 弥生時代の遺構	11
(2) 中世の遺構	13
(3) 近世の遺構	16
5. 遺物	
(1) 弥生時代の遺物	23
(2) 中世の遺物	24
(3) 近世の遺物	25
6. まとめ	27

引用・参考文献

写真図版

挿図目次

図 1 遺跡位置図	3
図 2 周辺の遺跡分布図	4
図 3 基本土層序模式図	6
図 4 調査区配置図	7
図 5 グリッド配置図および土層断面位置図	8
図 6 土層図 1	9
図 7 土層図 2	10
図 8 弥生時代の遺構全体図	11
図 9 SD01 の平断面図	12
図 10 中世の遺構全体図	13
図 11 SK09 の平断面図	14
図 12 SX02・SX03 の平断面図	15
図 13 近世の遺構全体図	16
図 14 近世土壌の平断面図	18
図 15 SX01 の平断面図	19
図 16 近世の柱穴列配置図	20
図 17 柱穴列エレベーション図	21
図 18 弥生時代の遺物	23
図 19 中世の遺物	24
図 20 近世の遺物	25
図 21 能島遺跡方形周溝墓配置図	28
図 22 第2次調査との弥生時代の遺構合成図	29
図 23 第2次調査との中世の遺構合成図	30
図 24 第2次調査との近世の遺構合成図	31

表目次

表 1 周辺遺跡一覧表	5
表 2 弥生時代の遺構一覧表	12
表 3 中世の遺構一覧表	15
表 4 近世の遺構一覧表	22
表 5 遺物観察表	26

図版目次

図版 1 1. 調査区全景（南東から） 2. 調査区全景（西から）
図版 2 3. 調査区土層断面（西壁） 4. 調査区土層断面（北壁）
図版 3 5. 調査区精査（北から） 6. SD01 遺物出土状況（南から）
図版 4 7. SD01 断面（西から） 8. SD01 完掘（東から）
図版 5 9. SP05 断面（南から） 10. SP05 完掘（西から）
図版 6 11. SK08 断面（東から） 12. SK08 完掘（東から）
図版 7 13. SP12 断面（南から） 14. SP12 完掘（西から）
図版 8 15. 弥生時代の遺物 16. 中世の遺物 17. 近世の遺物

1. 調査に至る経緯

能島遺跡は、昭和 58 年静清バイパス建設に伴う試掘調査で発見された遺跡である。試掘調査に当たっては、能島地域が清水平野の中で微高地上に存在しているため、遺跡の有無を確認する必要が生じた。試掘調査を実施したところ、弥生土器片や灰釉陶器片が出土し、遺跡の存在が明らかになった。この結果に基づき昭和 60 年に財団法人静岡県埋蔵文化財研究所が本発掘調査 1 次調査を実施し、弥生時代中期の方形周溝墓 27 基と平安時代から中世にかけての自然流路や溝跡、井戸跡、掘立柱建物跡、土坑などが発見された。その後、平成 9 年度には静清バイパスと交差する形で、都市計画道路日の出町押切線が計画され、平成 17 年度に確認調査を実施し、弥生時代中期の包含層が検出できた。この調査結果に基づき平成 19 年に発掘調査 2 次調査を実施し、弥生時代中期の方形周溝墓 4 基、古代の土坑 6 基、溝 1 本、ピット 78 個、近世の土坑 47 基、溝 4 本が確認された。

今回、隣接する都市計画道路日の出町押切線の予定地内で、平成 24 年 12 月に東側市道と日の出町押切線との連絡路の整備と道路改良工事が計画された。これに先立って、平成 25 年 4 月 1 日から連絡路部分について発掘調査を実施した。今回の調査は、昭和 60 年度、平成 19 年度に次いで、今回で 3 回目となるため、第 3 次調査とした。

なお、静岡市では、現体制では調査の遅延等の事態が生ずるなどの場合に限り、民間調査組織を導入することができるとされた『平成 10 年 9 月付、庁保伝第 75 号「埋蔵文化財の保護と発掘調査の円滑化等について」』に基づき、平成 20 年度以降、緊急性が強く求められる民間開発に伴う発掘調査に限り、民間調査組織を導入することとしている。今回の調査原因である都市計画道路日の出町押切線は、静岡市建設局道路部清水道路整備課を工事主体とする公共工事であるため、本来は静岡市教育委員会（生活文化局文化スポーツ部文化財課）が発掘調査すべきである。しかし、現体制では他の発掘調査との兼ね合いから平成 25 年度内に調査を実施することが困難となった。しかし、本工事が生活道路として緊急性が強く求められ平成 25 年度に実施するため、やむを得ず民間調査組織を導入することとなった。

2. 環境

(1) 地理的環境（図 1）

能島遺跡は、静岡県静岡市清水区能島を中心として分布する遺跡である。能島遺跡の立地する清水平野は、北側を南アルプス前山に連なる庵原山地に、南側を名勝日本平で有名な有度丘陵に挟まれており、麻機沼付近を水源とする巴川の三角洲として標高 5.0 ～ 7.0m の低地を主体として形成されている。清水平野はその範囲の多くを古折戸湾と重複しており、古折戸湾が沖積化する過程は、砂堆によるものと庵原山地や有度丘陵からの河川により扇状地・微高地を形成したものと異なる。能島遺跡の立地する地点から海岸までの約 3.0 km は砂堆によるもので、その西側の扇状地・微高地による部分ではその発達が弱く、殆どが湿地帯である。これは巴川の土砂運搬の弱さを示しており、事実、巴川の勾配は 1000 分の 0.3 で、興津川の 1000 分の 9、安倍川の 1000 分の 6 と比べると非常になだらかなのである。能島遺跡はこのような能島地区の標高 4.3m から 5.4m 前後のところに位置している。

(2) 歴史的環境（図2・表1）

ここでは能島遺跡と中世の遺跡を中心にふれてみたい。中世における清水平野の東側、巴川流域の左岸には、藤原維清が駿河守を解任された後に、入江町に土着して形成した入江氏の一族が館を構えていた。能島遺跡の南に隣接する能島館跡には維清の次子維綱が、南東約1.5kmにある北入江館跡（カナヤ長者屋敷跡）には弟清定が館を構えており、入江から巴川流域を開発していった。鎌倉時代の武士居館は一边が100～200mの方形単郭館が多く、周囲に濠や土塁を巡らせていた。濠内には領主の館や郎等の館、社寺などともに百姓の家や水田もあり、百姓を支配しつつ守護もしていた。南東約1.0kmには洪川氏の洪川館跡があるが、昭和10年の調査記録によると、西南の一部が破壊されているが幅約10～12m、高さ約2.0mの土塁とその外側に濠が一边約200mにわたって巡らされており、原形をとどめていたという。しかし現在では東北隅の一部に幅約8.0m、高さ約1.8m、全長約25.0mの土塁と幅約1.0mの濠を残すのみである。西約2.1kmには飯田館跡がある。ここでは6×3間と5×2間の掘立柱建物が見つかった。南約1.3kmには吉香氏の吉川館跡がある。この吉香氏とは吉川氏のことで、のちに承久の乱で手柄を立てて安芸国佐東郡に地頭職を得て移転し、明治まで続く大名に成長した。しかし、東西69間、南北132間の空堀があったという記録が残るのみで、現在では痕跡は残っていない。同様に、東約850mにある高橋氏の高橋館跡、南東約3.5kmにある矢部氏の矢部館跡、南東約2.0kmにある南入江館跡、南東約2.2kmにある東入江館跡、南東約700mにある北脇館跡など、多くの館跡があるが、痕跡が残っているものは少ない。このような中に能島遺跡は存在する。



図1 遺跡位置図 (S=1/10,000 国土地理院 1/25,000 地形図を拡大)

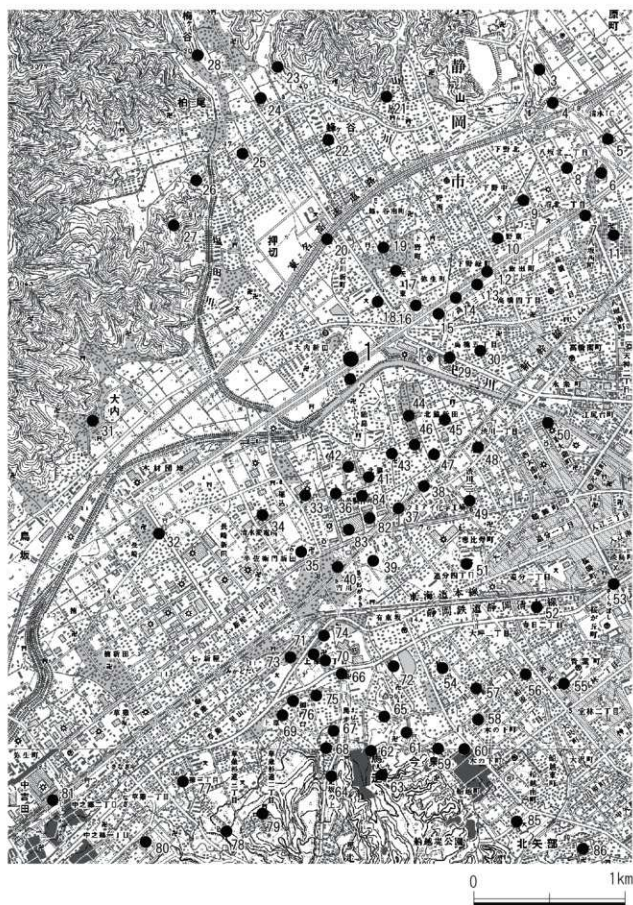


図2 周辺の遺跡分布図（国土地理院 1/25,000 地形図）

表1 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代	種別	所在地	備考
1	龍島遺跡	弥生・古墳	散布地	龍島	
2	龍島館跡	中世	館跡	龍島	
3	牛王堂山日遺跡	旧石器～弥生・古墳	散布地	麻原町上午王堂	
4	牛王堂山古墳群	古墳	古墳	麻原町上午王堂	
5	龍山遺跡	弥生	散布地	西久保子龍山	
6	山ノ根遺跡	弥生	散布地	八坂町山ノ根	
7	大田切上遺跡	縄文～鎌倉	散布地	高橋町中野原	
8	大田切上遺跡	弥生～古墳	散布地	高橋町大田切上	
9	大田切上遺跡	弥生	散布地	下野子山	
10	角田遺跡	弥生	散布地	下野子山	
11	熊田遺跡	鎌倉	館跡	八坂町字五反田	
12	下野遺跡 (A地区)	弥生	散布地	下野子三狐神	
13	下野遺跡 (B地区)	縄文	散布地	下野子三狐神	
14	下野遺跡 (C地区)	弥生～古墳	散布地	下野子三狐神	
15	熊田遺跡 (久保田地点)	弥生～鎌倉	散布地	高橋町字久保田	
16	熊田遺跡 (南原地点)	弥生～古墳	散布地	天王町字南原	
17	熊田遺跡 (菅原大島地点)	弥生～古墳	散布地	石川子菅原大島	
18	熊田遺跡	弥生	散布地	天王町字南原	
19	石川上遺跡	弥生	散布地	石川子山	
20	石川上遺跡	弥生～古墳	集落跡	石川子一坂田	
21	山原古墳	古墳	古墳	山原字桑野	
22	鎌ヶ谷古墳群	古墳	古墳	鎌ヶ谷字小山	
23	和田山遺跡	平安	散布地	鎌ヶ谷字和田山	
24	鹿島古墳	古墳	古墳	鎌ヶ谷字宮上	
25	イセヤ塚古墳	古墳	古墳	鎌ヶ谷字中田	
26	相尾山遺跡	縄文	散布地	相尾字向山	
27	相尾山古墳群	古墳	集落	相尾字向山	
28	中山古墳群	古墳	古墳	鎌ヶ谷字中山	
29	高橋館跡	弥生	散布地	高橋町北堀敷	
30	一木松遺跡	古墳	散布地	大井1丁目	
31	高橋館跡	平安～鎌倉	館跡	高橋町北堀敷	
32	長崎遺跡	弥生	散布地	長崎字大北原	
33	鎌込遺跡	古墳	散布地	吉川字久根ノ内	
34	鎌込遺跡	古墳	散布地	鎌込字日俣田	
35	杉田遺跡	縄文?	散布地	吉川字杉田	
36	原田上遺跡	弥生	集落跡	吉川字中塚田	
37	原田上遺跡	弥生	散布地	北郷字上田	
38	原田上遺跡	弥生～古墳	散布地	北郷字中田	
39	原田上遺跡	弥生～古墳	散布地	吉川字上長田	
40	吉川館跡	鎌倉	館跡	吉川字堀敷	
41	吉川上遺跡	弥生～鎌倉	散布地	吉川字岩蔵	
42	吉川上遺跡	古墳	散布地	吉川字神崎	
43	上ノ段遺跡	弥生	散布地	吉川字上ノ段	
44	高木遺跡	弥生	散布地	北郷新田字高木	
45	風見の段遺跡	弥生	散布地	北郷新田字大堀敷	
46	北郷館跡	戦国	館跡	北郷新田字大堀敷	
47	北郷遺跡	古墳	散布地	北郷字下田	
48	池川館跡	鎌倉	館跡	池川字曲沢	
49	大田遺跡	中世	散布地	池川字大田	
50	大田遺跡	縄文・古墳	散布地	池川字久保	
51	老人江船跡 (カナヤ長春屋敷跡)	平安末～室町初	館跡	道分4丁目	
52	南大江船跡	平安～室町	館跡	春日2丁目	
53	東大江船跡	平安～室町	館跡	桜橋町	
54	楠木田遺跡	古墳	散布地	有東坂字楠木田	
55	宇多祠遺跡	弥生	散布地	西高町	
56	大沢川河床遺跡	古墳	散布地	船原1丁目	
57	熊田遺跡	古墳	散布地	船原1丁目	
58	西高田遺跡	弥生～古墳	散布地	木の下の字西高田	
59	今泉上遺跡	古墳	散布地	今泉字上ノ下	
60	今泉上遺跡	古墳	散布地	今泉字上ノ上	
61	瓦ヶ谷古墳群	奈良	集 (瓦)	今泉字瓦ヶ谷	
62	馬走橋穴	古墳	古墳	馬走字家平	
63	馬走古墳	古墳	古墳	馬走字家平	
64	堂ノ山古墳	古墳	古墳	馬走字家ノ山	
65	片瀬山古墳群	古墳	古墳	馬走北	
66	藤木遺跡 (上原日遺跡)	縄文	散布地	馬走字藤木	
67	上原遺跡 (坂上遺跡)	縄文～古墳	散布地	馬走字中原	
68	西方宮遺跡	縄文	散布地	馬走字四方沢	
69	下原遺跡	縄文	散布地	馬走字下原	
70	千手寺遺跡	弥生	散布地	上原字坂	
71	千手寺経塚	江戸	経塚	上原字坂	
72	山崎遺跡	縄文	散布地	有東坂字湯池	
73	荒古遺跡	弥生	散布地	上原字荒古	
74	京塚古墳	古墳	古墳	上原字京塚	
75	上原古墳群	古墳	古墳	馬走・上原	
76	神門塚古墳	古墳	古墳	馬走字下原	
77	堀原前古墳	古墳	古墳	草薙字堀原	
78	草薙古墳群	古墳	古墳	草薙字草薙	
79	草薙古墳群	中世	屋	草薙字草薙	
80	西の原古墳群	古墳	古墳	草薙字西の原	
81	大和製塩古墳群	弥生	散布地	中の郷字西川	
82	どんどん塚古墳群	古墳	古墳	吉川字長瀬	
83	二つぼた古墳群	古墳	古墳	吉川字沢渡	
84	沢渡古墳群	古墳	古墳	吉川字沢渡	
85	天神山下遺跡	縄文～古墳	散布地	北久保字梅ヶ坪	
86	矢部館跡	平安末～	館跡	南矢部字矢部	

3. 調査の概要

(1) 調査区の設定

調査対象地は、道路が計画されている箇所を対象としている。調査区に、1 m × 1 m グリッドを設定した。(図 4～5)

基準点は、街区基準点を用いた。AO グリッドの座標値は、 $X = -107988.000\text{m}$ $Y = -3793.000\text{m}$ 世界測地系である。標高値は、街区基準点から基準点測量により現地に取り付けた。各グリッドは、南北方向は南から北に A・B・C・・・とし、東西方向は西から東に 1・2・3・・・とした。これらの数字とアルファベットの組み合わせにより、A1・B2 というように南西の杭の名称より表記し、今回の調査面積は、27 m²である。

(2) 調査の経過

能島遺跡の調査は、平成 25 年 4 月 9 日から平成 25 年 5 月 9 日までの 19 日間をかけて実施した。

平成 25 年 4 月 9 日 調査区周囲のフェンス、ハウス、トイレの設置を行い、重機による掘削を開始した。

4 月 10 日 人力による掘削を開始し、遺構の確認を行った。

4 月 11 日 溝 1 条、土壌 3 基を確認して、基準点測量を行った。

4 月 12 日 土壌 6 基を確認し、半裁して出土遺物の写真撮影および測量を行った。

4 月 15 日 ビット 14 基を確認し、半裁して不明遺構を確認し、新たにトレンチを設定した。

4 月 16 日 ビット 2 基を確認し、半裁して不明遺構の土層を確認し、写真撮影した。

4 月 17 日 ビットの半裁状況の写真撮影を行い、完掘した。

4 月 18 日 不明遺構内に土壌を確認し、半裁後、写真撮影した。

4 月 19 日 土壌の半裁状況の写真撮影を行い、完掘した。検出遺構の測量を行った。

4 月 22 日 溝の精査を行い、土器を確認した。不明遺構より煙管が出土した。

4 月 23 日 不明遺構を完掘する。溝の精査を行い、土器を確認した。

4 月 24 日 不明遺構の壁面に旧河川の流れ込みを確認し、トレンチを設定した。溝を完掘した。

4 月 25 日 調査区全体写真を撮影した。調査区壁の写真測量を行った。

4 月 26 日 フェンス、トイレの撤去を行った。

4 月 27 日 ハウスの撤去を行った。

5 月 1 日 旧河川の下層の掘削を行った。

5 月 2 日 地山検出面まで掘削を行った。

5 月 7 日 地山検出面の掘削を完了した。

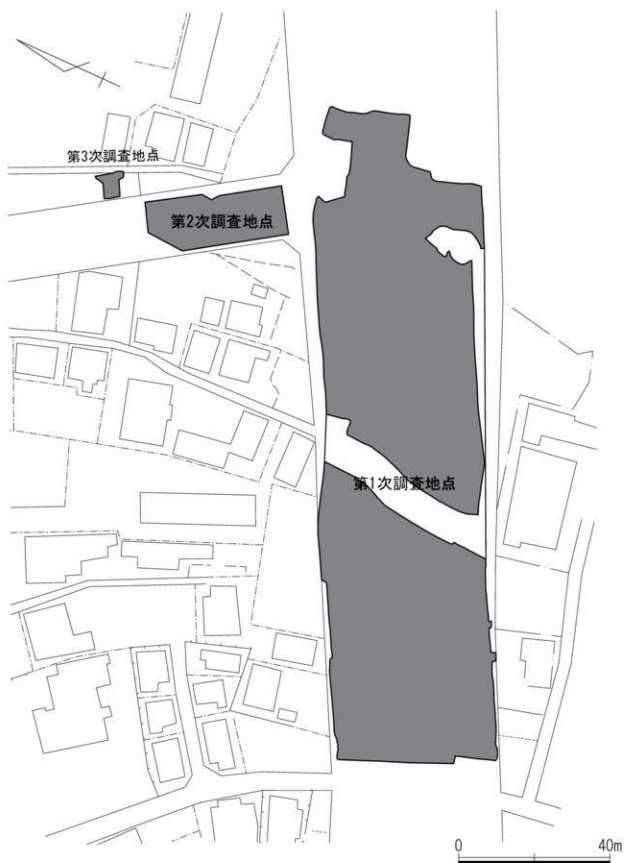
5 月 9 日 重機による埋戻しを完了した。

(3) 層位の観察 (図 3・6～7)

能島遺跡の基本的な土層は 2 層から成る。第 I 層は表土層 (1) で厚さ約 20 ～ 40cm を測る。第 II 層はにぶい黄色土で礫を含む層 (9.12.13.14.15.16) で、厚さ約 10 ～ 60cm を測る。調査区の北西部に多くみられ、遺構のベースとなるものである。調査区の中で第 2 層の見られない部分では、遺構は地山層 (2.3.4) をベースとしている。



図 3 基本土層序模式図



第1次調査地点及び、第2次調査地点の図は
 1989 財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所『能島道跡（本文編）』及び
 2010 静岡市教育委員会『能島道跡発掘調査報告書』より作成した

図4 調査区配置図 (S=1/1,000)

3. 調査の概要

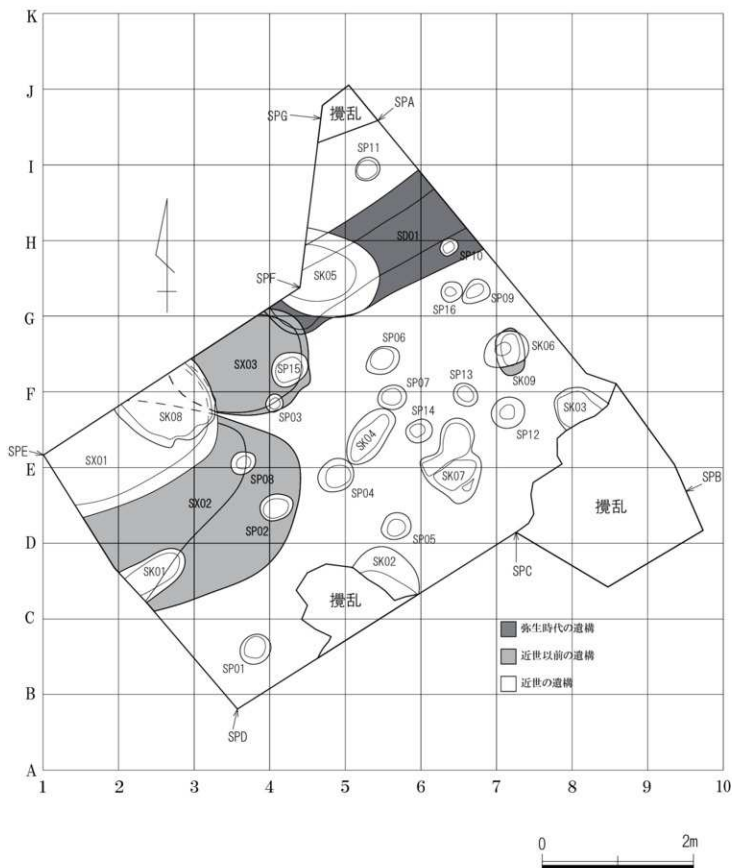
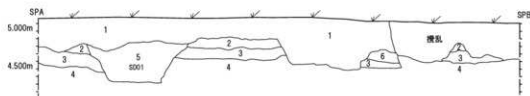
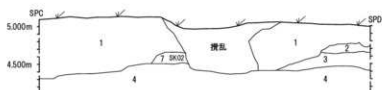


図5 グリッド配置図および土層断面位置図 (S=1/50)

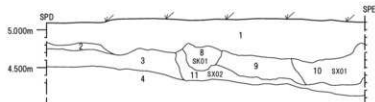
東壁



南壁



西壁



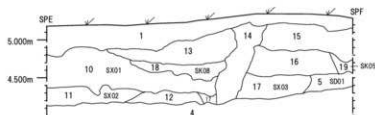
<土層説明>

- 第1層：(表土) オリブ褐色細礫土。締まり強く粘性弱い。(地山)
 第2層：2.5V1/3 にぶい黄褐色硬土。締まり強く粘性弱い。(地山)
 第3層：10YR4/3 オリブ褐色細礫砂硬土。締まり強く粘性弱い。(地山)
 第4層：2.5V1/3 オリブ褐色細礫砂硬土。締まり強く粘性弱い。(地山)
 第5層：10YR3/2 黒褐色土。締まり強く粘性弱い。(S001)
 第6層：2.5V1/3 オリブ褐色硬土。締まり強く粘性弱い。
 第7層：10YR4/6 褐色細礫。締まり強く粘性弱い。(S002)
 第8層：10YR3/3 暗褐色土。締まり強く粘性やや弱い。礫少量含む。(S001)
 第9層：2.5Y3/3 暗オリブ褐色土。締まり強く粘性弱い。礫多い。

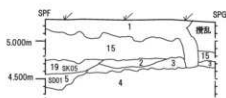


図6 土層図1 (S=1/50)

北壁



北西壁



<土層説明>

- 第10層：S15/2 灰オリブ粘土 締まり強く 粘性弱い 礫少量含む (SX01)
- 第11層：2. S14/3 オリブ褐色粘土 締まり強く 粘性やや強い (SX02)
- 第12層：2. S14/3 オリブ褐色粘土 締まり強く 粘性やや強い
- 第13層：2. S16/3 にぶい黄色粘土 締まり強く 粘性弱い 礫を含む
- 第14層：S15/2 灰オリブ粘土 締まり強く 粘性弱い 礫少量含む
- 第15層：2. S16/3 にぶい黄色土 締まり強く 粘性強い ガラスを含む
- 第16層：2. S14/3 オリブ褐色土 締まり強く 粘性弱い 礫を含む
- 第17層：101X4/4 褐色粘土 締まり強く 粘性弱い (SX03)
- 第18層：101X4/3 にぶい黄褐色硬土 締まり強く 粘性強い 土器片を含む (SK08)
- 第19層：101X4/4 褐色土 締まり強く 粘性やや強い 礫を多く含む (SK05)



図7 土層図2 (S=1/50)

4. 遺構

おもな遺構としては、弥生時代の溝、中世の土壇、近世の土壇、ピットが確認できた。

(1) 弥生時代の遺構

弥生時代の遺構としては溝1本が確認できた。(図8・表2)

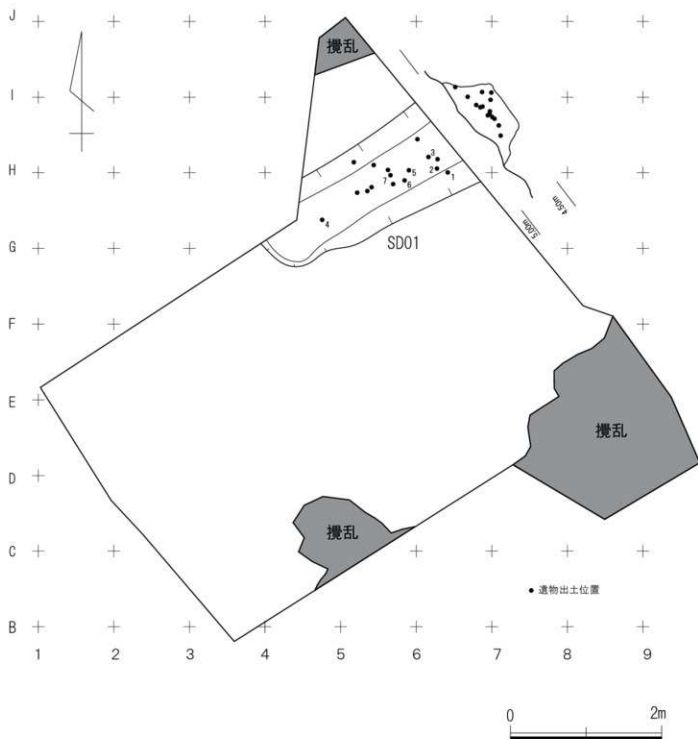


図8 弥生時代の遺構全体図 (S=1/50)

4. 遺構

1) 溝状遺構（図9）

SD01はF4・G4・G5・G6・H4・H5・H6 グリッドにあり、東側と北西隅が調査範囲外のため全体の規模・形状は不明であるが、先端は方形にまどまると思われる。残存長は2.76m、幅1.09m、深さ0.44mを測り、断面はU字型である。覆土は黒褐色土である。過去の能島遺跡の調査で発見された方形周溝墓と比較すると、第1次調査、第2次調査では、N-0°-W～N-15°-Wをとる周溝の主軸方位が、SD01ではN-30°-Wとなっているが、形状・覆土から方形周溝墓の周溝の可能性が考えられる。遺物は弥生土器の細片が出土している。

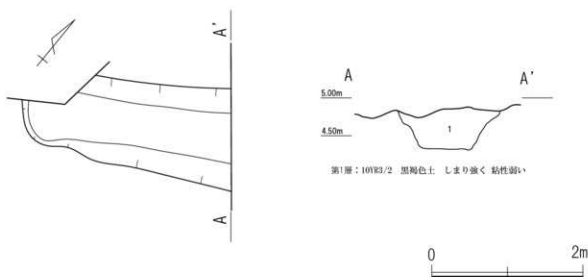


図9 SD01の平断面図（S=1/50）

表2 弥生時代の遺構一覧表

番号	位置	最大長	巾	深さ	主軸方向	断面形	覆土	備考
SD01	F4・G4・ G5・G6・ H4・H5・ H6	(2.76)	1.09	0.44	N-30°-W	U字型	黒褐色土	東・西は攪乱と調査区範囲で切られており不明

(2) 中世の遺構

中世の遺構としては土壇 1 基、不明遺構 2 基が確認できた。(図 10・表 3)

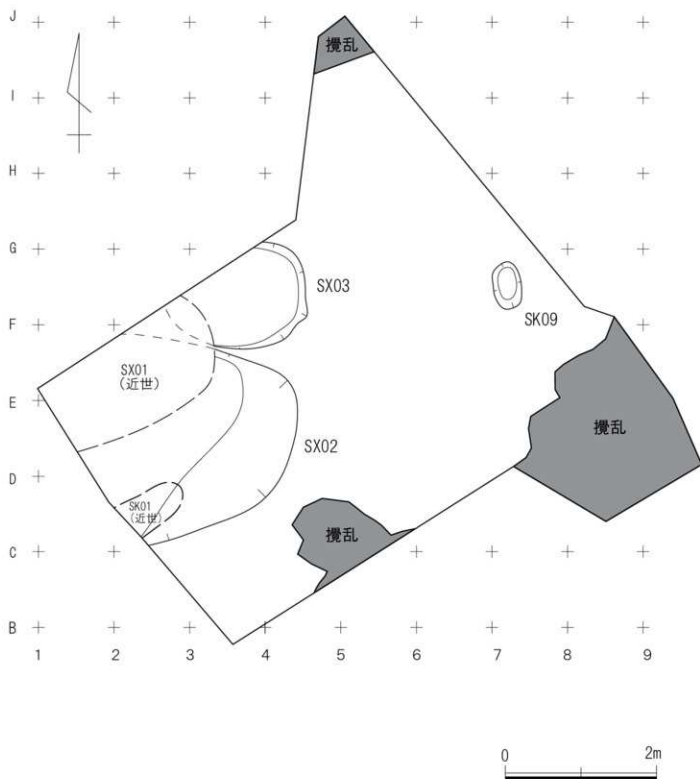


図 10 中世の遺構全体図 (S=1/50)

4. 遺構

1) 土壇 (図 11)

SK09 は F7 グリッドにあり、全長 0.60m、幅 0.36m、深さ 0.16m を測る。平面は楕円形、断面は U 字型である。覆土は暗褐色粘土で、遺物は出土していない。



図 11 SK09 の平断面図 (S=1/40)

2) 不明遺構 (図 12)

SX02 は C2・C3・D2・D3・D4・E3・E4 グリッドにあり、北西を SX01 に切断され、南西が調査範囲外のため不明である。残存長 3.00m、幅 1.62m、深さ 0.67m を測り、断面は U 字型である。覆土はオリーブ褐色粘土で、遺物は出土していない。

SX03 は E3・E4・F3・F4 グリッドにあり、南西を SX01 に切断され、北西が調査範囲外のため不明である。残存長 1.76m、幅 1.42m、深さ 0.35m を測り、断面は U 字型である。覆土は褐色粘土で、遺物は出土していない。

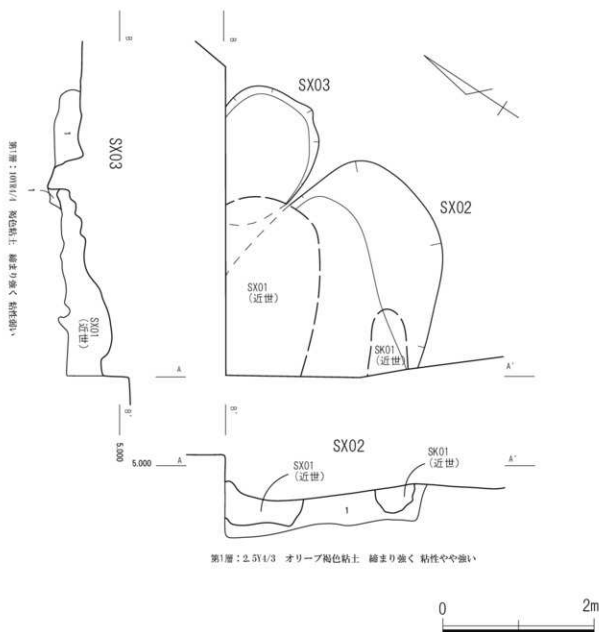


図 12 SX02・SX03 の平面図 (S=1/50)

表 3 中世の遺構一覧表

番号	位置	最大長	巾	深さ	平面形	断面形	覆土	備考
SK09	F7	0.60	0.36	0.16	楕円形	U字型	暗褐色粘土	
SX02	C2・C3・ D2・ D3・ D4・E3・ E4	(3.00)	(1.62)	0.67	円形	U字型	オリーブ褐色粘土	北はSX01に切られており、西は調査範囲外のため不明
SX03	E3・E4・ F3・F4	(1.76)	(1.42)	0.35	円形	U字型	褐色粘土	西はSX01に切られており、北は調査範囲外のため不明

(3) 近世の遺構

近世の遺構としては土塋 8 基、ピット 16 基、不明遺構 1 基、柱穴列 3 列が確認できた。(図 13・表 4)

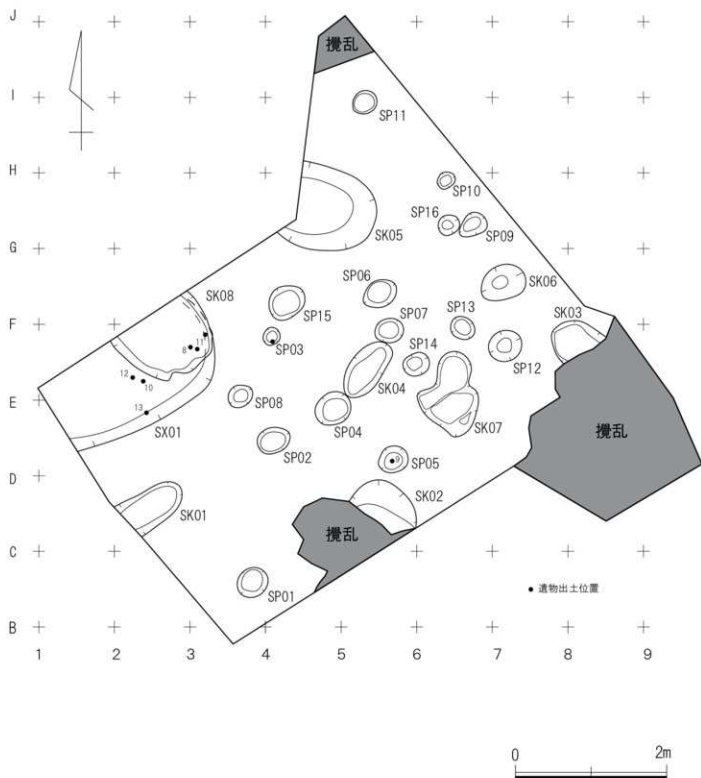


図 13 近世の遺構全体図 (S=1/50)

1) 土壌 (図 14)

SK01はC2グリッドにあり、西が調査範囲外のため全体の規模・形状は不明である。残存長0.83m、幅0.45m、深さ0.23mを測り、平面は楕円形、断面はコ字型である。覆土は暗褐色土で、遺物は出土していない。

SK02はC5グリッドにあり、南を擾乱に切断されているため全体の規模・形状は不明である。残存長0.90m、幅0.52m、深さ0.23mを測り、平面は円形、断面はU字型である。覆土は褐色細礫土で、遺物は出土していない。

SK03はE7・E8グリッドにあり、南東を擾乱に切断されているため全体の規模・形状は不明である。残存長0.47m、幅0.66m、深さ0.15mを測り、平面は円形、断面はU字型である。覆土は黄褐色礫土で、遺物は出土していない。

SK04はE5グリッドにあり、全長0.85m、幅0.45m、深さ0.19mを測る。平面は楕円形、断面はコ字型である。覆土は暗褐色粘土で、遺物は出土していない。

SK05はG4・G5グリッドにあり、西が調査範囲外のため全体の規模・形状は不明である。残存長1.06m、幅1.06m、深さ0.19mを測り、平面は円形、断面はU字型である。覆土は褐色土で、遺物は出土していない。

SK06はF6・F7グリッドにあり、全長0.62m、幅0.44m、深さ0.09mを測る。平面は楕円形、断面はU字型である。覆土はにぶい黄褐色粘土で、遺物は出土していない。

SK07はD6・E6グリッドにあり、全長1.13m、幅0.81m、深さ0.21mを測る。平面は不定形、断面はU字型である。北にテラス状の段差がある。覆土は暗褐色細礫土で、遺物は出土していない。

SK08はE2・E3・F2・F3グリッドにあり、北が調査範囲外のため全体の規模・形状は不明である。残存長1.27m、幅0.91m、深さ0.29mを測り、平面は円形、断面はU字型である。覆土はにぶい黄褐色粘土で、遺物は磁器が1点出土している。

2) ピット

SP01はB3・B4グリッドにあり、全長0.44m、幅0.39m、深さ0.26mを測る。平面は円形、断面はコ字型である。覆土はにぶい黄褐色礫土で、遺物は出土していない。

SP02はD3・D4グリッドにあり、全長0.45m、幅0.34m、深さ0.21mを測る。平面は楕円形、断面はコ字型である。覆土は褐色粘土で、遺物は出土していない。

SP03はE4グリッドにあり、全長0.23m、幅0.21m、深さ0.10mを測る。平面は円形、断面はU字型である。覆土は暗褐色粘土で、遺物は出土していない。

SP04はD4・D5・E4・E5グリッドにあり、全長0.48m、幅0.42m、深さ0.24mを測る。平面は円形、断面はコ字型である。覆土はにぶい黄褐色粘土である。遺物は出土していない。

SP05はD5グリッドにあり、全長0.39m、幅0.32m、深さ0.26mを測る。平面は円形、断面はコ字型である。覆土はにぶい黄褐色粘土で、遺物は輸入陶磁が1点出土している。遺物の年代は近世以前であるが、遺構覆土の状況から近世の遺構とした。

SP06はF5グリッドにあり、全長0.49m、幅0.36m、深さ0.20mを測る。平面は楕円形、断面はコ字型である。覆土はオリーブ褐色細礫土で、遺物は出土していない。

SP07はE5・F5グリッドにあり、全長0.37m、幅0.32m、深さ0.20mを測る。平面は円形、断面はコ字型である。覆土はにぶい黄褐色粘土で、遺物は出土していない。

SP08はD3・E3グリッドにあり、全長0.33m、幅0.28m、深さ0.17mを測る。平面は円形、断面はU字型である。覆土はにぶい黄褐色粘土で、遺物は出土していない。

4. 遺構

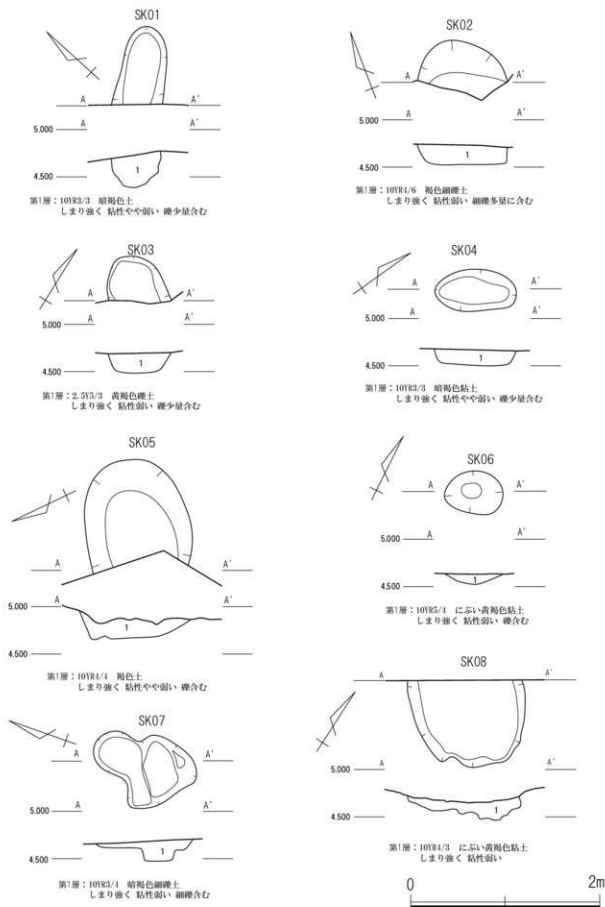


図 14 近世土壌の平断面図 (S=1/40)

SP09 は G6 グリッドにあり、全長 0.38m、幅 0.29m、深さ 0.21m を測る。平面は楕円形、断面は U 字型である。覆土はオリーブ褐色細礫土で、遺物は出土していない。

SP10 は G6 グリッドにあり、全長 0.24m、幅 0.20m、深さ 0.14m を測る。平面は円形、断面はコ字型である。覆土は黒褐色土で、遺物は出土していない。

SP11 は H5・I5 グリッドにあり、全長 0.33m、幅 0.29m、深さ 0.19m を測る。平面は円形、断面はコ字型である。覆土はオリーブ褐色細礫土で、遺物は出土していない。

SP12 は E6・E7 グリッドにあり、全長 0.45m、幅 0.41m、深さ 0.13m を測る。平面は円形、断面は U 字型である。覆土はにぶい黄褐色粘土で、遺物は出土していない。

SP13 は E6・E7 グリッドにあり、全長 0.34m、幅 0.30m、深さ 0.14m を測る。平面は円形、断面はコ字型である。覆土はにぶい黄褐色礫土で、遺物は出土していない。

SP14 は E5・E6 グリッドにあり、全長 0.34m、幅 0.28m、深さ 0.13m を測る。平面は円形、断面は U 字型である。覆土はオリーブ褐色細礫土で、遺物は出土していない。

SP15 は F4 グリッドにあり、全長 0.50m、幅 0.40m、深さ 0.21m を測る。平面は円形、断面はコ字型である。覆土は黄褐色粘土で、遺物は出土していない。

SP16 は G6 グリッドにあり、全長 0.28m、幅 0.26m、深さ 0.16m を測る。平面は円形、断面は U 字型である。覆土は褐色細礫土で、遺物は出土していない。

3) 不明遺構 (図 15)

SX01 は D1・D2・E1・E2・E3・F2・F3 グリッドにあり、北・西が調査範囲外のため全体の規模・形状は不明である。残存長 2.64m、幅 1.22m、深さ 0.58m を測り、平面は長方形、断面はコ字型である。覆土は灰オリーブ色粘土で、遺物は須恵器 1 点、陶器 2 点、金属器 1 点が出土している。その中に近世以前の遺物も含まれるが、近世の遺物も出土しているので近世の遺構とした。

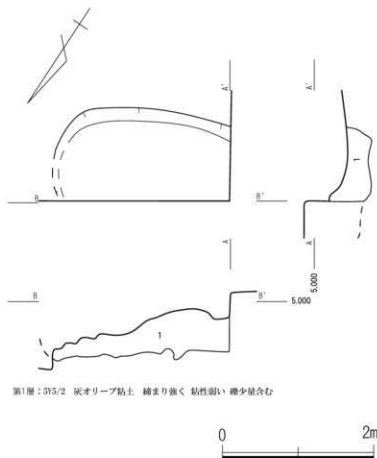


図 15 SX01 の平断面図 (S=1/50)

4. 遺構

4) 柱穴列 (図 16・図 17)

柱穴列 01 は北から順に SP15、SP02、SP01 で構成される柱穴列である。主軸方向は $N-9^{\circ}-E$ を示している。柱間距離は 1.8m である。

柱穴列 02 は西から順に SP08、SK04、SP12 で構成される柱穴列である。主軸方向は $N-80^{\circ}-E$ を示している。柱間距離は 1.8m である。

柱穴列 03 は北から順に SP09、SP12 で構成される柱穴列である。主軸方向は $N-10^{\circ}-W$ を示している。柱間距離は 1.8m である。柱穴列 02 とは直交方向を示しているが、合わせて建物を構成するかは不明である。

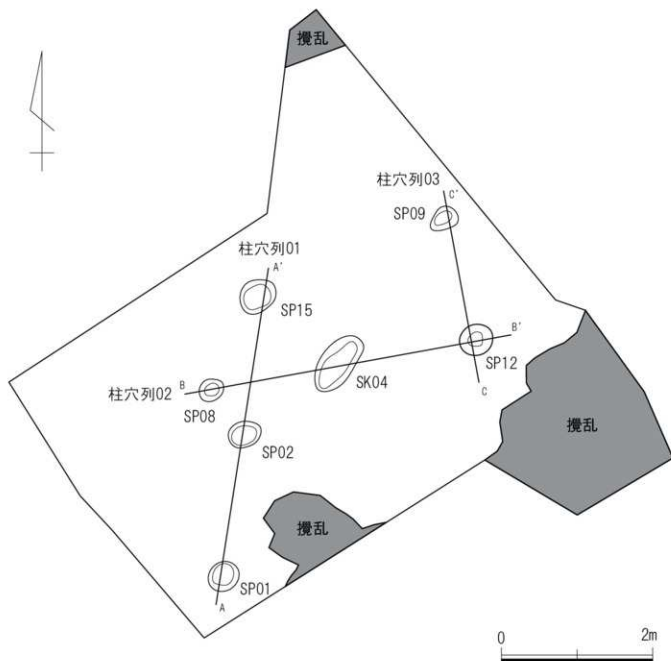


図 16 近世の柱穴列配置図 (S=1/50)



図 17 柱穴列エレベーション図 (S=1/50)

表4 近世の遺構一覧表

番号	位置	最大長	巾	深さ	平面形	断面形	覆土	備考
SK01	C2	(0.83)	0.45	0.23	楕円形	コ字型	暗褐色土	西は調査範囲外のため不明 SX02を切断
SK02	C5	(0.90)	(0.52)	0.23	円形	U字型	褐色細礫土	南は攪乱に切られており不明
SK03	E7・E8	(0.47)	(0.66)	0.15	円形	U字型	黄褐色礫土	南は攪乱に切られており不明
SK04	E5	0.85	0.45	0.19	楕円形	コ字型	暗褐色粘土	
SK05	G4・G5	(1.06)	1.06	0.19	円形	U字型	褐色土	西は調査範囲外のため不明
SK06	F6・F7	0.62	0.44	0.09	楕円形	U字型	にぶい黄褐色粘土	
SK07	D6・E6	1.13	0.81	0.21	不定形	U字型	暗褐色細礫土	
SK08	E2・E3・ F2・F3	(1.27)	(0.91)	0.29	円形	U字型	にぶい黄褐色粘土	北は調査範囲外のため不明 SX01を切断
SP01	B3・B4	0.44	0.39	0.26	円形	コ字型	にぶい黄褐色礫土	
SP02	D3・D4	0.45	0.34	0.21	円形	コ字型	褐色粘土	
SP03	E4	0.23	0.21	0.10	円形	U字型	暗褐色粘土	
SP04	D4・ D5・E4・ E5	0.48	0.42	0.24	円形	コ字型	にぶい黄褐色粘土	
SP05	D5	0.39	0.32	0.26	円形	コ字型	にぶい黄褐色粘土	
SP06	F5	0.49	0.36	0.20	円形	コ字型	オリーブ褐色細礫土	
SP07	E5・F5	0.37	0.32	0.20	円形	コ字型	にぶい黄褐色粘土	
SP08	D3・E3	0.33	0.28	0.17	円形	U字型	にぶい黄褐色粘土	
SP09	G6	0.38	0.29	0.21	楕円形	U字型	オリーブ褐色細礫土	
SP10	G6	0.24	0.20	0.14	円形	コ字型	黒褐色土	SD01を切断
SP11	H5・I5	0.33	0.29	0.19	円形	コ字型	オリーブ褐色細礫土	
SP12	E6・E7	0.45	0.41	0.13	円形	U字型	にぶい黄褐色粘土	
SP13	E6・F6	0.34	0.30	0.14	円形	コ字型	にぶい黄褐色礫土	
SP14	E5・E6	0.34	0.28	0.13	円形	U字型	オリーブ褐色細礫土	
SP15	F4	0.50	0.40	0.21	円形	コ字型	黄褐色粘土	
SP16	G6	0.28	0.26	0.16	円形	U字型	褐色細礫土	
SX01	D1・ D2・E1・ E2・E3・ F2・F3	(2.64)	(1.22)	0.58	長方形	コ字型	灰オリーブ色粘土	北、西は調査範囲外のため不明、 SX02・SX03を切断

5. 遺物

(1) 弥生時代の遺物

出土した弥生土器のうち7点を図示した。(図18・表5)すべて、SD-01から出土したものである。

全体の磨耗が激しく、口縁部及び底部の残存がなく殆どが胴部の破片と見られ、器形・形態等詳細は不明である。

1・3・4・5の外面には、櫛描紋と思われる細かな刷毛目が観察できる。2・6・7は、全体に荒い単位の縦の刷毛目が観察できる。

胎土は、やや粗く、ほとんどが石粒の混合材を含んでいる。

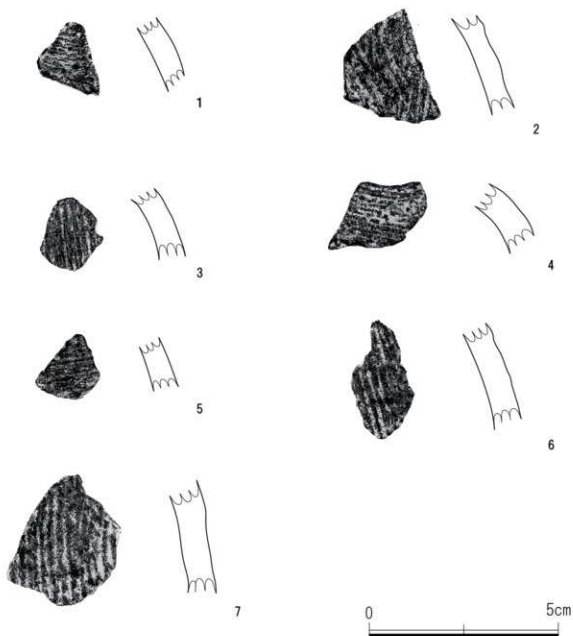


図18 弥生時代の遺物 (S=1/1)

(2) 中世の遺物

出土した土器のうち4点を図示した。(図19・表5)

9はSP05より出土した輸入陶磁の白磁皿と思われる。底部まで施軸されていることと、胎土に黒い粒子が多く混ざっていることから輸入陶磁と思われる。13世紀後半～14世紀前半頃のものと思われる。なお、SP05は遺物の年代は近世以前であるが、覆土の状況から近世の遺構とした。

10はSX01より出土した輸入陶磁の青磁器と思われる。器種は不明である。

13はSX01より出土した須恵器の壺瓶類と思われる。内外面ともに無軸で、内面はナデ、外面はケズリ調整されている。なお、SX01は出土遺物の一部の年代は近世以前であるが、近世の出土遺物も存在することから近世の遺構とした。

14は遺構外より出土した須恵器で器種は不明と思われる。外面に灰釉がかかっている。付帯の接着部分のみ残存している。

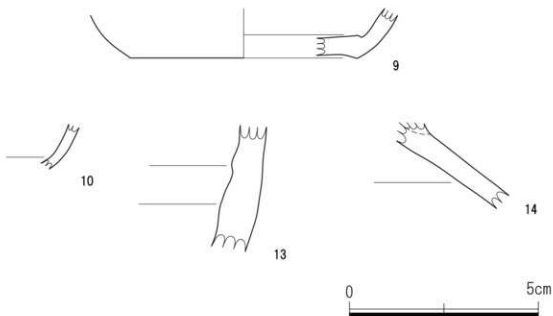


図19 中世の遺物 (S=1/1)

(3) 近世の遺物

出土した土器のうち4点を図示した。(図20・表5)

8はSK08より出土した肥前産磁器の染付碗と思われる。外面に二重網目文の一部がみられる。近世後半に属すると思われる。

11はSX01より出土した煙管の雁首と思われる。首部が直線的で、火皿が直角に近い角度で取り付けられていることからVI段階に属すると思われる。

12はSX01より出土した器種不明の陶器と思われる。外面に鉄軸がかかっている。近世に属すると思われる。

15は表採された陶器の高台部分と思われる。皿類か瓶類の貼付高台が接着不十分だったために剥がれたものと思われる。近世に属すると思われる。

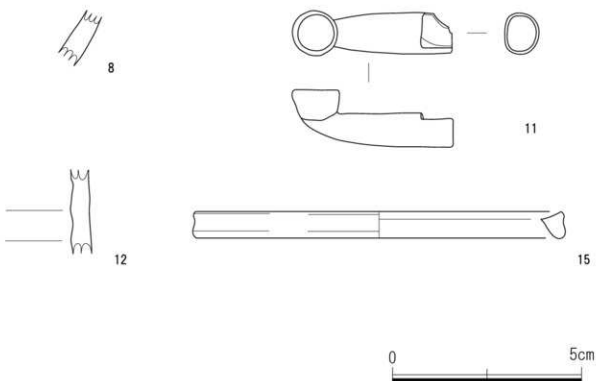


図20 近世の遺物 (S=1/1)

表5 遺物観察表

No.	遺構	種類・部材	法量 (cm) 口径・部高・底径	形 態	製 作 技 法	胎土・焼成・色調	残存	備考
1	S001	弥生土器	- -	壺?	外面に細かな横刷毛目（櫛歯紋）	やや粗 石粒の混合材を含む 良 にふい橙 (7.5YR 7/3)	胴部一部残存	
2	S001	弥生土器	- -		外面全体に荒い単位の縦と斜めの 刷毛目	やや粗 石粒の混合材を含む 良 にふい橙 (5YR 7/4)	胴部一部残存	
3	S001	弥生土器	- -		外面に細かな横刷毛目（櫛歯紋）	やや粗 石粒の混合材を含む 良 にふい橙 (7.5YR 6/4)	胴部一部残存	
4	S001	弥生土器	- -		外面に細かな横刷毛目（櫛歯紋）	やや粗 石粒の混合材を含む 良 橙 (2.5YR 6/6)	胴部一部残存	
5	S001	弥生土器	- -		外面に細かな横刷毛目（櫛歯紋） 内面僅かにヘラ痕	やや粗 砂礫を含む 良 にふい黄橙 (10YR 7/2)	胴部一部残存	
6	S001	弥生土器	- -		外面全体に荒い単位の縦と斜めの 刷毛目	やや粗 砂礫を含む 良 橙 (5YR 7/6)	胴部一部残存	
7	S001	弥生土器	- -	壺?	外面全体に荒い単位の縦と斜めの 刷毛目	やや粗 石粒の混合材を含む 良 にふい橙 (5YR 7/4)	胴部一部残存	
8	S008	磁器	- -	碗 肥前	二重網目文	密 良 青白色	胴部一部残存	
9	SP05	白磁	- (3.0)	皿 輸入陶磁	IX類 13c 後半～14c 前半	密 良 灰白色 (8N)	底部一部残存	
10	S301	青磁	- -	輸入陶磁		密 良 明緑灰色 (7.5GY 7/1)	胴部一部残存	
11	S301	金属器	全長 4.2 1.5	煙管雁首	火皿径 1.2 火皿高 0.8		胴部一部欠損	
12	S301	陶器	- -	不明	近世	密 良 灰赤色 (2.5YR 6/2)	胴部一部残存	
13	S301	須恵器	- -			やや粗 良 灰白色 (8N)	胴部一部残存	
14	遺構外	須恵器	- -			やや粗 良 灰白色 (8Y.5YR 8/2)	胴部一部残存 付帯の一部残存	
15	表採	陶器	- (4.8)	不明 高台部	近世	密 良 明陶灰色 (7.5GY 7/2)	底部一部残存	

6. まとめ

今回の調査は、27 mという調査範囲の中で、弥生時代、中世、近世の時期と思われる遺構が確認された。周辺で実施された過去の調査結果を参考にして、弥生時代の方形周溝墓の溝の可能性のあるSD01が確認できた。(図21参照)SD01からの出土遺物は、弥生土器片であるが、いずれも細片であるため、器形・形態等の詳細は不明である。

中世の遺構は、土壌と不明遺構が確認されたが、出土遺物がなく、時期は特定できなかった。

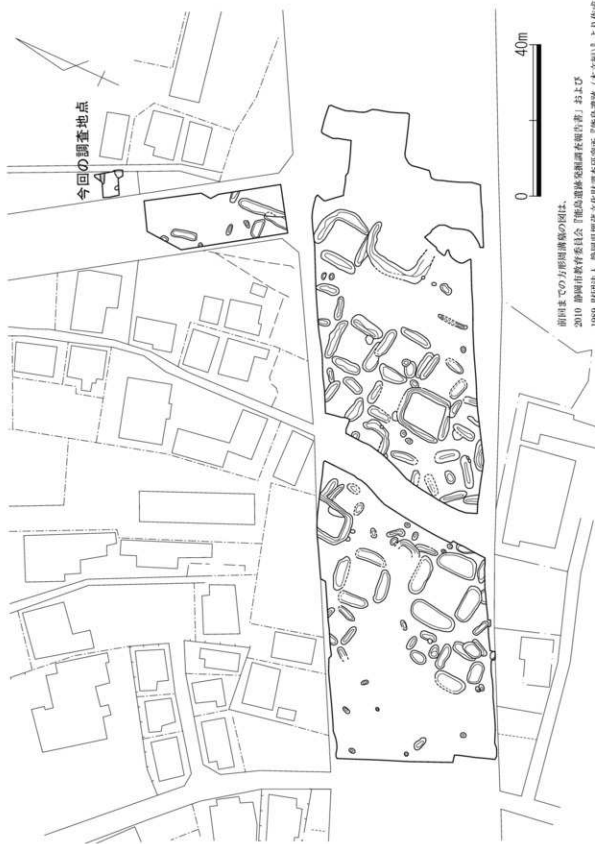
近世の遺構としては、土壌、ピット、不明遺構が確認された。ピットの配列から柱穴列の可能性のあるものが3列確認されたが、調査範囲が狭く、全容は明らかにできない。出土遺物は、陶磁器片と煙管等が出土し、ある程度、時期の特定できる遺物が出土した。

今回は、調査範囲が限られた中での調査で、資料の追加ができたことと、過去の調査結果とは異なる主軸方位を持つ方形周溝墓の溝の可能性のある遺構が確認されたことをふまえて、遺跡範囲が広がる可能性を提示出来たことが、成果としてあげられる。今回の結果をふまえ、既往の調査結果を加味して能島遺跡の性格について考えてみたい。

弥生時代においては、第1次調査と第2次調査で計31基の方形周溝墓が検出されており、今回検出された1基を加えて計32基の方形周溝墓が検出されたこととなる。特に今回検出された方形周溝墓は、墓域がさらに北側に広がる可能性を示したものであり、これら方形周溝墓の被葬者集団の居住域の発見もあわせて、今後の調査に期待したい。

中世及び、近世については、少量ながら輸入陶磁が出土していることが、第1次調査の報告書による「津」の役割を想定されていることとの関連をうかがわせる。また、第1次調査で検出された井戸に加えて、第2次調査で墓やピットが検出され、今回もピットが検出されており、恒常的な施設の存在をうかがわせる。建物の検出は今後の課題としたい。

なお、参考資料として、「能島遺跡発掘調査報告書」2010との遺構の合成図(図22～図24)を作成したので、今後の調査の参考資料として報告したい。



前図までの方形周溝墓の図は、
2010 静岡県教育委員会『能島遺跡発掘調査報告書』および
1989 財団法人 静岡県立文化財調査研究所『能島遺跡（本文編）』より作成した

図 21 能島遺跡方形周溝墓配置図 (S=1/1,000)

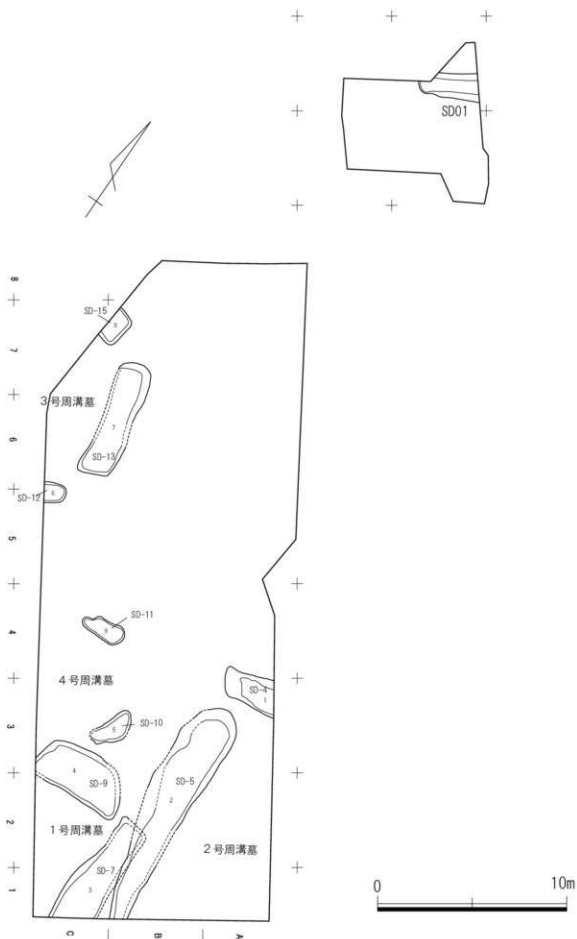


図 22 第2次調査との弥生時代の遺構合成図 (S=1/200)

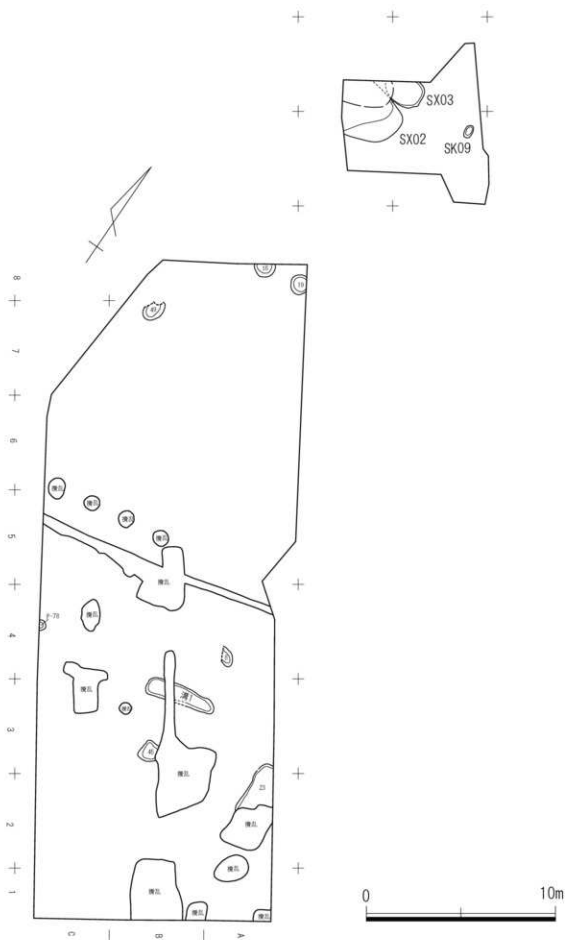


図 23 第2次調査との中世の遺構合成図 (S=1/200)

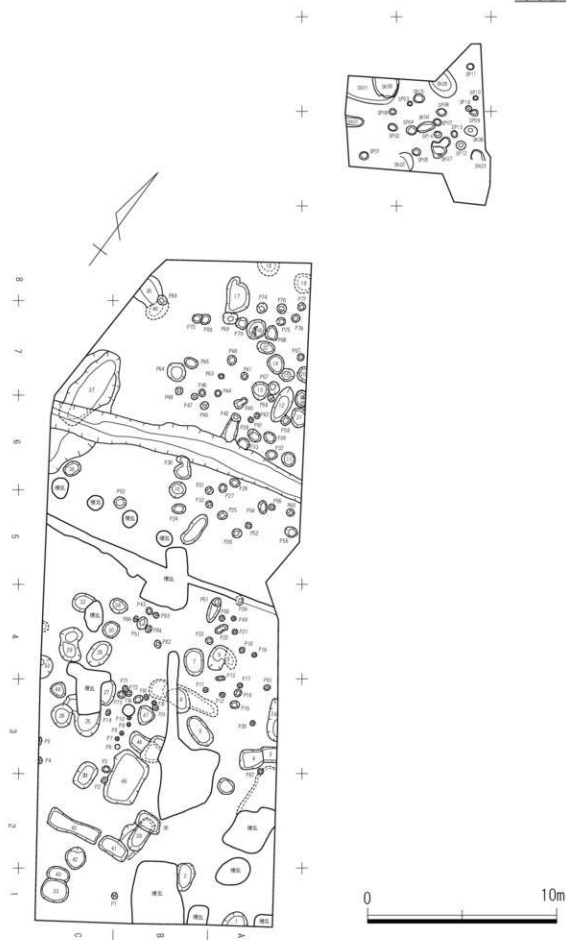


図 24 第2次調査との近世の遺構合成図 (S=1/200)

引用・参考文献

- 沼館愛三 1935 年 静岡県郷土研究協会
『静岡県郷土研究 第5輯』
「有度山塊を中心とする古城館跡の研究」
- 横田賢次郎他 1978 年 九州歴史資料館
『九州歴史資料館研究論集 4』
「大宰府出土の輸入中国陶磁器について—型式分類と編年を中心として—」
- 静岡県教育委員会 1987 年
『静岡県の中世城館跡』
- 森田勉他 1982 年 日本貿易陶磁研究会
『貿易陶磁研究 NO.2』
「14～16世紀の白磁の分類と編年」
- 古泉弘 1983 年 10月9日発行 柏書房株式会社
『江戸を掘る 近世都市考古学への招待』
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1988 年 3月30日発行
『内荒遺跡（遺物編）昭和62年度静岡バイパス（川合地区）埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1988 年 3月30日発行
『能島遺跡（図版編）昭和60年～62年度静岡バイパス（能島地区）埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1989 年 3月31日発行
『能島遺跡（本文編）昭和60年～63年度静岡バイパス（能島地区）埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1991 年 3月30日発行
『宮下遺跡（遺物編）平成2年度静岡バイパス（川合地区）』
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1992 年 3月30日発行
『川合遺跡（遺物編2）平成3年度静岡バイパス（川合地区）埋蔵文化財発掘調査報告書
（石製品・金属製品本文編）』
- 原廣志 1999 年 静岡県菊川町教育委員会
『静岡県指定史跡 横地城跡—総合調査報告書—』
「横地氏関連遺跡群と周辺遺跡の特徴について」
- 江戸遺跡研究会 2001 年 4月25日発行 柏書房株式会社
『図説 江戸考古学研究事典』
- 静岡県教育委員会 2006 年 3月31日発行
『静岡市遺跡地名表（附 静岡市遺跡地図）』
- 瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター 2006 年 12月9日発行
『江戸時代のやきもの—生産と流通—記念講演会・シンポジウム資料集』
- 片平剛他 2008 年 3月21日発行 パル文化財研究所
『有東遺跡 店舗建設に伴う第21次発掘調査報告書』
- 静岡市教育委員会 2010 年 3月31日発行
『能島遺跡発掘調査報告書』

写真図版



1. 調査区全景（南東から）



2. 調査区全景（西から）



3. 調査区土層断面（西壁）



4. 調査区土層断面（北壁）



5. 調査区精査（北から）



6. SD01 遺物出土状況（南から）



7. SD01 断面 (西から)



8. SD01 完掘 (東から)



9. SP05 断面（南から）



10. SP05 完掘（西から）



11. SK08 断面 (東から)



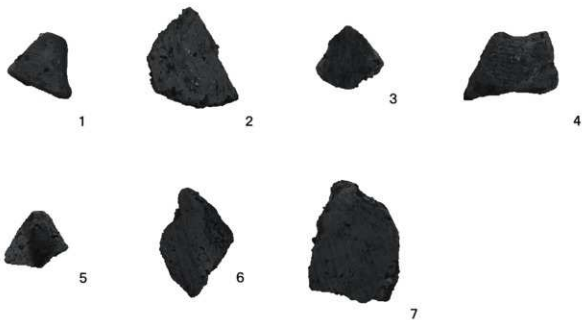
12. SK08 完掘 (東から)



13. SP12 断面（南から）



14. SP12 完掘（西から）



15. 弥生時代の遺物



16. 中世の遺物



17. 近世の遺物

報告書抄録

ふりがな	のうじまいせき							
書 名	能 島 遺 跡							
副 書 名	第3次発掘調査報告書							
シリーズ名	静岡市埋蔵文化財調査報告			シリーズ番号				
編 著 者 名	大川敬夫（静岡市教育委員会）、片平 剛、佐野貴紀（パル文化財研究所）							
編 集 機 関	静岡市教育委員会							
所 在 地	〒420-8602 静岡県静岡市葵区追手町5-1 TEL 054-221-1085							
発行年月日	平成25（2013）年9月30日							
所収遺跡名	所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	度分秒	度分秒			
		（世界測地系）						
のうじまいせき 能島遺跡	しずおかけん しずおかし しずおか 静岡県 静岡市 清水区 おおうちしん でん 大内 新田7-1	22201	市 C111	35°	138°	2013年 4月9日～	27㎡	道路建設
				01′	27′	2013年		
				35″	31″	5月9日		
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
能 島 遺 跡	墓	弥生～近世	方形周溝墓 溝状遺構 建物跡 土壌		弥生土器、陶器			

静岡県静岡市清水区

能島遺跡

— 第3次発掘調査報告書 —

開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成25（2013）年9月15日 印刷

平成25（2013）年9月30日 発行

編集・発行 静岡市教育委員会

〒420-8602 静岡県静岡市葵区追手町5-1

TEL 055-221-1085

印刷：（有）文書サービス

TEL 054-284-3030

